

本書はドイツの法律家バイエルが出版した、近世星座図の基礎ともいえる星図帳で、五十一枚の銅版図に千七百の星が描かれています。星座の起源は、約五千年前の古代メソポタミア文明と考えられています。古代の人々にとって、星は、方位や時刻、季節の移り変わりを知り、牧畜、農業などの時期を見極めるための大切な目印でした。

現在は、八十八種の星座が制定されており、そのうち四十八種は、二世紀のエジプトの学者プトレマイオスの著書に記述があります。その後も些少な追加や変更

されていますが、現行星座の大部分は二千年前にはすでに用いられていました。

十四世紀に大航海時代が到来すると、航海家たちはアジアをめざして南極付近に航路を進め、それまで見ることのできなかつた星々を目にします。そして、夜空に新しい目印となる星座を生み出してきました。

本書には、プトレマイオスの四十八星座に、新たに南天の十二星座を加えた六十星座が収録されています。また各星座を構成する星に、光度の順にギリシャ文字のアルファベットを用いて名前が付けられました。これは「バイエル符号」と称され、今も採用されています。

(天理図書館 德島照代)

❖五千年も輝き続ける 夜空に映る目印

本書はドイツの法律家バ

イエルが出版した、近世星

図の基礎ともいえる星図帳

で、五十一枚の銅版図に千

七百の星が描かれています。

星座の起源は、約五千年

前の古代メソポタミア文明

と考えられています。古代

の人々にとって、星は、方

位や時刻、季節の移り変わ

りを知り、牧畜、農業など

の時期を見極めるための大

切な目印でした。

現在は、八十八種の星座

が制定されており、そのう

ち四十八種は、二世紀のエ

ジプトの学者プトレマイオスの著書に記述があります。

その後も些少な追加や変更

はありますですが、現行星座の大部分は二千年前にはすでに用いられていました。

天球を外側から見た図、つまり私たちが見ている星座とは反転して描かれています。しかし、本書は、地上から見上げたままの星座を描いた最初の資料もあります。

掲出は、晩春から初夏にかけて南の空に大きく現れる黄道第六座おとめ座です。

ギリシャ神話では農業の女神とされ、左手に持つ麦穂には、ラテン語で「穂」を意味する α 星の「スピカ」が位置します。右羽根の上部、しし座 β 星デネボラと、

図には見えていませんが、うしかい座 α 星アルクトゥルスの三つで「春の大三角形」を構成しています。

◇天理図書館のお知らせ

Tel 0743-63-9200 URL <https://www.tcl.gr.jp/>

◇平日(午前9時~午後5時半) 土・日・祝(午前9時~午後4時半)

○本書は、仙台市博物館で7月6日~8月25日開催の「大航海時代へ—マルコ・ポーロが開いた世界—」に出品します。

※最新の情報については公式HP、X(旧Twitter)でご確認ください。



►【うらのめとりあ】

ヨハン・バイエル

アウグスブルク 1603年刊

縦34.0cm 横24.0cm



ウラノメトリア

やまとこの名品